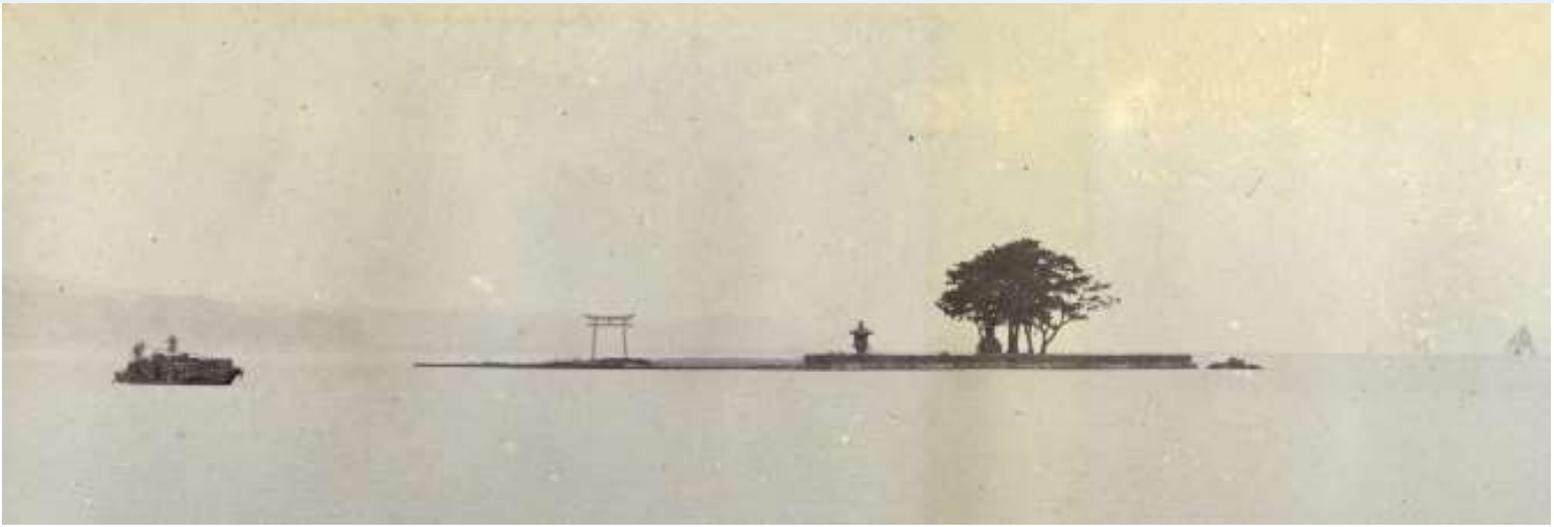


## 国際文化観光都市 70 周年記念

### 登録記念物 嫁ヶ島 ——石に込めた文人たちの想い——



昭和 26 年(1951)3 月に「松江国際文化観光都市建設法」が公布され、松江市が国際文化観光都市となって 70 年になります。「松江国際文化観光都市建設法」の国会での法案趣旨説明では、小泉八雲が嫁ヶ島を含めた松江の美しさを世界に知らせたことを強調し、制定に至りました。また、3 月 26 日には、嫁ヶ島が国の登録記念物(名勝地関係)に登録されました。

現在の嫁ヶ島には、大灯籠、鳥居、詩碑の 3 つの石塔物があります。これらの石塔物は、ながさかせきたい永坂石埭やたなべさくろう田邊朔郎などの文人や学者が遺しその足跡を刻んだものです。本展では松江歴史館の館蔵品の中から石塔物の拓本や書を展示し、文人らが嫁ヶ島に遺した想いを紹介します。

#### 1. 大灯籠



○ 大灯籠の拓本



「清風」



「太白館  
龜齋意匠」



「白瀧窟  
為七造」

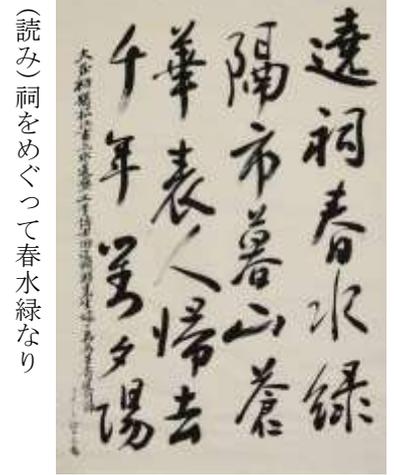
大灯籠は、明治 28 年(1895)頃の県収税長であった金子造酒蔵が、転任後に松江を懐かしみ同 36 年(1903)に献納したものである。松江の名工である荒川龜齋(太白館龜齋)がデザインし、石工の石谷為七(白瀧窟為七)が久多美石を使用して造る。総高 3.38m の大型灯籠である。

## 2. 鳥居



（意識）この嫁ケ島のほこらのまわりは春の緑色の湖水に取り囲まれ、松江市街の向こうに暮れなずむ青白い山が見える。鳥居は自分が帰ったあとも、永遠にこの夕陽に照らされることであろう。

### ○鳥居に刻まれた漢詩



（読み）祠をめぐって春水緑なり

市を隔てて暮山蒼し

華表の人帰り去るも

千年夕陽に對す

嫁ケ島には市杵島姫命いちきしまひめのみことを祀る竹生島神社が鎮座する。その竹生島神社の鳥居で、柱に漢詩が刻まれている。明治39年(1906)、京都帝国大学教授の田邊朔郎たなべしよくろう(琵琶湖疎水工事の設計者)が松江を訪れた際、田邊の教え子で県土木課員であった大野亀之丞らと嫁ケ島で遊び、また松江の上水道敷設について指導を受けた。翌年、この時の記念として田邊が寄進したのがこの石造鳥居である。柱の漢詩は田邊が詠んだものを、当時の松江市長高橋義比たかしちかの書によって刻んだ。展示資料は、この詩を料亭魚一の主人であった吉村よしのが書き記したものの。

## 3. 詩碑(表面)



### ○詩碑裏面「嫁洲詩碑陰記」の拓本

（意識）宍道湖のすばらしさは日本で他に匹敵するものは少ない。さらに嫁ケ島はその湖の中でも特に絶景である。大正元年十一月に永坂石埭翁がこの地に来て、剪淞吟社同人たちと詩作を共にし酒を酌み交わした。その昔、唐の漢詩人である李白が南湖を訪れた際に、湖の名を遺すため郎官湖という嘉名を付けたという。永坂翁も同じ気持ちであったろう。そのため、剪淞吟社同人が話し合い、永坂翁の作「碧雲湖棹歌」一首を碑に刻んで、嫁ケ島に建立した。今後松江を旅行するかたがこの碑を眺め、この詩を朗読して、言い広めてくだされば、宍道湖嫁ケ島が世間で有名になろう。さらには永坂翁と我が剪淞吟社の名前も永遠に伝わるであろう。（以上、要木順一『碧雲湖棹歌訳注』(四)、「島大言語文化」第二十一号、二〇〇六年）参照



松江の漢詩人を中心に活動していた漢詩結社「剪淞吟社」せんしゅうぎんしゃは、大正元年(1912)に当代きつての漢詩人永坂石埭ながさかせきたいを松江に招き、ともに遊んだ。石埭はこの際の情景を大正3年(1914)に「碧雲湖棹歌」として発表し、翌年剪淞吟社の同人がその活動を後世に伝えるために詩碑を建立、表には石埭の「碧雲湖棹歌」を刻み、裏面には碑の由来を同人の村上壽夫が文章をまとめ藤脇善政が書いた。拓本は同人の一人であった田代家旧蔵のもの。

表の詩は「美人不見碧雲飛 惆悵湖山入夕暉 一幅淞波誰剪取 春潮痕似嫁時衣」と記す。